

# 学校研究だより

南部小  
平成 17 年  
8 月 2 2 日 小北

## 2 学期もよろしくお願ひします

夏休み、大学に通わせてもらいました。そこで、小川先生に教えてもらったり、本を読んだりしながら私が見つかったことを紹介します。みなさんが子どもたちと接するときの、参考にしてください。

私が日頃、抱えていた疑問や悩み

○疑問 1 現場を離れ、「学ぶことはこんなに楽しいものだったか」と再認識した。子どもたちに伝えるべきことは、学習内容のみならず、学ぶ喜びや楽しさだったと思った。しかし、いざ、実践してみると、「できるまでさせなくては」という意識が強くなる自分がある。そうすると、低位の子供にばかり接する機会が多くなり、これではだめだと思った。大学で、私は、個別指導ではなく、個人指導の大切さを身をもって感じた。さて、学ぶ喜びと個人指導の両立をどう図るか？

河合隼雄・谷川俊太郎『こころに届く授業 教える楽しみ 教わる喜び』小学館 2002年  
p. 4 谷川

教える、教わるという関係は与える、受け取るという関係ではなく、ともに楽しみともに考えるという関係なのだということでした。教える側はもうすでに知っていることを教えるのですが、その知っていることをもう一度子どもたちとともに、未知のものとして追体験すると言えはいいのでしょうか。先生自身を知る喜びを失わずにいれば、それが子どもたちに伝わってそこにひとつの楽しい「場」が出現するのではないのでしょうか。

佐伯胖『「わかり方」の探究』小学館 2004年  
「遊ぶ」ということの意味  
p. 210

たとえば、運動会の「練習」で、みんなができる「跳び箱」がぜんぜんできない子どもにも、「努力」と「練習」を強いて、なんとしてでも「できるよ」に「してしまう」というのは、どう考えても「遊び」ではなく、まさしく「お勉強」そのものだ。そうやって自分の弱点を「克服」すれば、本人に自信がついて、以後、いろいろなことに挑戦するだろうというのが、「教える側」の論理であろう。しかし、「他人より三倍苦勞して、やっと他人と同等になれた」とは、本当の「自信」につながるとはかぎらない。

佐藤学『教師たちの挑戦——授業を創る 学びが変わる』小学館 2003年 p. 153 東京  
都港区愛育養護学校 岩崎禎  
子校長の言葉

通常、教育というと、子どもが「できないこと」を大人が教えることを中心に展開されるが、愛育養護学校では「子どもができることを十分にやること」と、そして「子ども自身が自分の学校生活をつくること」を中心に活動を展開していると語っている。この二つの言葉は、子どもに対する信頼と尊敬が生まれる二つの基盤を端的に表現している。子どもの尊厳を脅かしているもの、子どもに対する大人の信頼を引き裂いているものは、「できる・できない」の尺度で人間を見る大人社会の偏見である。

## このごろよく言われる「学び」とは何か？

もっと子どもを信頼する教育。教師と同じ学ぶ者として、一人の人間として接するということであると小川雅子先生は言う。「同志同行」といつている。

1 学期に見たく教師が教えるより、ずっといいと思えた子供同士の学び合い>

- S 君には、教師でなければ教えられないだろうと思っていた。が、算数のテスト直しを友達同士で行っていたとき、S 君の周りに数人の子が集まり、熱心に教え、教わる姿が生まれていた。
- 毎日、天気の詳細を書かせている。見る力を伸ばすためのものである。その際、私はいつもやっていたモデルの提示を一切やめた。その代わりに、子どもが見たこと、表現したことをときおり、パソコンで打ち、それをみんなで読み合うという学習を重ねた。モデルを提示すると、そのモデルに合うようにしなければという意識が働いて自分の見方が深まっていけないときが多い。子どもたちは、友達の表現に刺激され、教師以上にいい記録を書く。
- 誕生日のメッセージカードを適当に書く子供が減らない。教師が何度しかつてもなかなか直らなかった。しかし、五年生が書いた宿泊学習のお礼のカードを見たことで、内容、そめ方、丁寧さが、瞬時に心の中に入っていったという感じであった。

このような事実から、私はもっと子どもを信じたいなと思った。自分より年も下で、分からないことも多いけれど、私にはないよさを持っていて、友達のよさに気づき、自分の中に入れることができるのだなと思った。それが、上から学習内容を伝授する教育ではなく、大事なことを教師が教えてしまう教育ではなく、「自分で気づく」ようにもっていく教育ということなのかなと考えた。

そう考えると「伝え合う」ことはまさに「学び合う」こと。

## 評 価

『わかり方の探究』 p. 214

バケモノではなく、ハゲミとしての「評価」

「ハゲミ」というのは、何かが成し遂げられたとか、完成したという「成果物」があつて得られるものとはかぎらず、学習過程や制作過程で「この調子でやっていいんだ」という実感を得る場合もある。

「ハゲミ」は他人から得るものをは限らない。自分の周辺に起こる「出来事」で、「ああ、この調子でやっていけばいいんだ」とか、「よし、この調子でもうひとがんばりしよう」という気になるということもある。また、自身の成長や進歩を自分で確認して、一層の研鑽に励むこともある。

p. 215 自分よきの自覚

「ハゲミ」というのは、基本的には、「自己評価」だと言えなくもない。ただ、いわゆる「自己評価」というのは、その枠組みは他人から与えられ、それらの枠組みや基準に照らして、「自分はどうかなのか」という「自己点検・評価」である。いわば、自分自身を「他人（外部評価者）」の目「で評価することをさす。それに對し、「ハゲミ」というのは、外からの枠組みや規準と無關係に「わき起こつてくる」ものであり、「発見」されるものである。